岑参二題

田中克己

一

唐詩が世界文学史上に占める位置については、いふをまたない。この唐詩の作者を指を折って数へれば、まづ李白、杜甫の二人が挙げられることにもまた異論がない。しかし唐詩の名声を保持する作者は、他にも数多くあって、あたかも李・杜の二明星を囲む群星のごとくである。その群星の中、光輝の烈しいのは誰だらう。絵をも善くした王維（摩詰）か、それともこのごろ中国の文学史家の多く挙げる(一)白居易であらうか。元軫白俗と元稹とともに貶しめられた白居易の最近のこの好評はその諷諭の詩が、人民詩人の名を得さしめたからに相違ないが、旧来の文学史家ならば、王維の次には白居易でなく、他の詩人の名を挙げるかもしれない。

俗書ではあるが明の李攀龍の「唐詩選」を例にとって見よう。これは白居易を嫌って、その作品は一篇も採ってゐない。元稹も皮肉にその白居易を詠じた詩一篇が選ばれてゐるのみである。李白の三十三首、杜甫の五十一首についで、王維は三十一首と、優に李白にせまっているが、これにまたせまって岑参の作品が二十八首とられている。李攀龍が偏好したとも考へられるが、私は「唐詩選」から唐詩を好くことをはじめたので、この偏向も今なほあながちにすてされない。

さて岑参の人となりについて知らうと思へば、「唐書」「新唐書」にも伝がなく、元の辛文房の「唐才子伝」はよく人が引くが、これは彼の詩集「岑嘉州集」の杜確の序の抄である。しかし、杜確だけでは満足できない人は、故聞一多氏の「岑嘉州繫年考証」(二)あたりを読むのが宜しからう。私などもこの論文はここ二十数年愛読して来た。

ただ聞氏に見えないで私のいまだに疑問としてゐるのは、岑参と李白との関係である。周知のごとく唐の諸詩人は互ひに交ること篤く、この詩人同士の交際がまた唐詩の盛行を来した理由の一である。従って各人の特色、詩風の変遷を見る上からも、これらの者の伝記をないがしろにはできない。岑

参も唐の詩人の例にもれず、杜甫、王昌齢、高適、薛據、賈至などの詩人たちとの交があったことは、それぞれの作品の題などから、明らかに証せられる。しかし李白との交際だけは、これによっては証せられない。

ただ李白の詩の中に「岑徵君」と呼ばれる者のあらはれる箇所が二箇所あり、「岑夫子」が一箇所にあらはれる。この岑徵君なり岑夫子が岑参だとすれば、両人の交情は薄くなかったことが知られるわけである。周知のごとく、岑は唐人にもあまり多く見える姓ではない。しかも李白の詩の「送岑徵君帰鳴皐山」といふ詩は、その冒頭に

岑公相門子

といふ一句があって、この徵君は疑ひもなく太宗の時の宰相象、高宗の時の宰相長倩、睿宗の時の宰相羲を出した岑参の一族の出身であることをあらはしてゐる。岑参みづからも、その感旧賦の序で

国家六葉吾門三相矣

と、家門を自ら誇りにしてゐるのである。

ただこの岑徵君が岑参であることは、早急には断定ができない。岑参は聞一多氏の考証によれば、開元三年（七一五）の生れであるといふ。この断定にはやや疑問があるが、この前後であることには疑ひがなく、長安元年（七〇一）生れの李白との間には、十四、五年のひらきがあり、杜甫とはほぼ同年輩である。

そこでまづ前述の詩の製作年代を考へると

余亦謝明主

といふ箇所があって、李白が玄宗の朝廷を辞した天宝三載以後であることを明らかにしてゐる。ところが聞一多氏によれば、岑参は天宝元年以来ずっと長安に滞在したことになってゐて、しかもこの三載には進士に及第してゐるのである(三)。徵君は召されて仕へない秀士の称であるから、この称からもまた岑徵君が三載以後に鳴皐山(四)に退隠したといふ点からも、岑参と岑徵君とは別人であるといふことになる。

岑徵君と鳴皐山とのつながりは、「鳴皐歌送岑徵君」といふ詩にもあらはれてゐて、前の詩と同時の作に違ひないが、梁園三尺雪、在清冷池作といふ自註も附されてをり、作詩の場所は漢の梁孝王の園のあったといふ、開封（汴州）でのことである。

そこで岑参の一族で、この徵君に当るものはと考へると、最も有力なのは彼の兄弟である。兄弟の中に彼にはづかしからぬ俊才のいたことは、杜甫の「渼陂行」に

岑参兄弟皆好奇

とうたひ、また王昌齢の「留別岑参兄弟」に

岑家雙瓊樹
騰光難為儔

といふ句のあることからも知られる。しかし杜甫の「皆」といふのは、「兄弟すべて」ではなく「兄弟ともに」の意で、王昌齢の「雙瓊樹」といふ句でわかる通り、参と二人そろっての文名をいふのだと思ふから、「新唐書宰相世系表」の示

す岑参の四人の兄弟、渭、況、秉、亜のうち、岑参のすぐ上の兄況であることは聞一多氏の考へ通りであらう。この兄は天宝元年ごろは江南の丹陽にあり、たぶんそのあとで山東の単父の尉に任ぜられたことが知られてゐる(五)が、岑参のごとく、すぐれた詩をのこしてはゐない。

そこで李白の友としての岑徴君はやはり岑参としたいのは人情として止むを得ないところである。

ただこの際、前述のごとく難点がいくつかある。先づ第一は、岑参は李白が長安を去って洛陽や開封（梁園）に往来してゐたころ、李白といれちがひに新進士としてすぐ右内率府兵曹参軍（近衛軍の庶務課長）の官に任ぜられ、その後も長安にゐたといふ点である(六)。しかし私はこれを李白の詩によって反対に、任官はしたが不平ですぐやめ、開封に来て李白に会ひ、鳴皐山(七)へ隠棲する志を告げ、実際にも「鳴皐歌」を餞けられて登って行ったと考へたい。鳴皐山にいつまでゐたか、寒素な道士の生活に彼が何ケ月耐へられたかは、私の想像を許さないが、天宝七載（七四八）に河西隴右軍へ赴いた顔真卿を送る詩(八)があり、これは長安での作であるから、このころまでには下山してゐたのであらう。

岑夫子といふ称は岑参ではなくて、岑勛であり、これがまた岑徴君であるといふのが、詹鍈教授の説(九)である。その理由は「将進酒」には

岑夫子、丹丘生
進酒君莫停
与君歌一曲
請君為我傾耳聴

とあり、また「酬岑勛見尋就元丹丘対酒相待以詩見招」といふ詩があって、元丹丘と親しい岑勛が「将進酒」でならべ称せられる岑夫子にちがひないといふのは、うなづける。しかしこれが同時に岑徴君だといふのには、確かな理由がない。もとより「新唐書宰相世系表」には勛の名は見えず、彼の閲歴(十)は明らかでない。しかも「鳴皐歌」は私も前に解説したことがあるが(十一)、李白の詩のなかでも、最も努力的な作である。出来上りの優劣は問はないが、作中に古語を用ひ、故事を多くひき、これらを解し得るのは徴君一人のみといふ期待があらはである。この期待にそふべき人は数多くの唐人、いな唐詩人の中でも、「早歳孤貧、能自砥礪、徧覧史籍、尤工綴文」(十二)と評せられた岑参を措いてはないと、私は考へたい。立証の根拠は非常にあやふやだが、李白や杜甫や岑参は、生前お互ひにその後世における文学史上の位置を、予知してゐたやうに私は思ふ。岑況や岑勛はその点からも当らないと私はいこぢに感じるのである。この岑徴君を岑参にあてゐる先人は、私の知るかぎりでは王琦、森槐南など少数である。しかも断案はもってゐないこと私と同様である(十三)。識者の教示を賜りたい。

二

岑参の作品の特色は、先人がすでに知ってゐて、辺塞詩人

の分類で、高適、王昌齢、王之渙、王翰などと一列にされる(十四)。しかし私の考へでは、王維、孟浩然らの田園詩人と呼ばれるたぐひとはもとより、これら同類の詩人とも、ちょっと趣を異にする点があるやうに思ふ。

彼は辺塞の実見者である。聞一多氏の考証するごとく、天宝八載(七四九)、三十五才のとき、入朝した安西四鎮節度使高仙芝に幕僚として招かれ、安西に赴いた。安西はすなはちいまの新疆省クチャで、全くの辺境である。こゝに留まること三年、天宝十載(七五一)、高仙芝は河西節度使に転じ幕僚たちはこの報を得るとすぐ武威(涼州)に遷った。岑参ももとよりその一人であったが、新興のサラセンのアッバス朝の軍は、唐の辺境を侵したので、高仙芝は大軍を率いてこれをチュー河のほとりタラスに伐って大敗した。これは世界史上の一大事件で、その結果、中央アジアはもとより新疆省のあたりまで、こののちはイスラム化する端を開いたのであるが、岑参らは、もとよりそんなことは知る由もなく、敗北した高仙芝とともに長安に還った。

第二次の辺塞行は天宝十三載(七五四)で、このたびは権北庭都護の封常清の幕僚としてであって、都護の駐地北庭、すなはちいまのウルムチ附近に赴き、輪台と北庭との間を往来して、本国に安禄山の乱の起ったあと、至徳二載(七五七)に、鳳翔の粛宗のもとに至って謁した。この時旧交のあった杜甫らが、岑参を「識度清遠、議論雅正、佳名早上、時輩所仰」と皇帝に推薦した文は、いまも杜甫の集中にのこってゐる(十五)。

この二度の辺塞生活は、いったい何を語ってゐるのか。彼が辺塞をそんなに厭ってゐない証拠なのではないだらうか。もしさうとすれば、これは漢人に珍らしいことである。異国いな異境を、いとはないでそのままに見てとり、歌ひあげてゐるとならば、中国文学史上、特異な存在といはねばなるまい。もとより「唐詩選」で有名な

玉関西望堪腸断

と断腸の思ひをうたった「玉関寄長安主簿」の趣は

胡笳一曲断人腸
坐客相看涙如雨

と「酒泉太守席上醉後作」でもくりかへされ、「送人還京」では

送君九月交河北(十六)
雪裏題詩涙満衣

と、作詩も郷愁のあらはれであることを示してゐるが、

一身従遠役　わが身は遠国での兵役につくと
万里向安西　万里かなたの安西都護府に向った。
漢月垂郷涙　故郷で見た月のおかげで懐郷の涙をながし
胡沙費馬蹄　沙漠の砂めは馬の蹄をてまどらせた。
尋河愁地尽　黄河の源をたづねようとして大地のはてに
　　来はしないかと心配し
過磧覚天低　沙漠をよぎれば空は地面にたれ下ってゐる

と思ふ。

送子軍中飲　きみを送って軍中で酒をのみ
家書醉裏題　家への手紙を醉ひにまかせて書きなぐった。

の詩（「磧西頭送李判官入京」）では、郷愁を酒のやや癒すをいひ、

聞説輪台路　聞けば輪台城への路は
年々見雪飛　年々雪がふぶくさうで
春風曾不到　春風など来たこともなく
漢使亦来稀　中国の使者もめったに来ないと。
白草通疎勒　白い草が疎勒（カシュガル）国への道をおしへ
青山過武威　青い山脈が武威（涼州）までつづいでゐると。
勤王敢道遠　王事につとめるのだ道の遠いことなぞいふものか
私向夢中帰　たゞしゆめではこっそり国に帰るよ。

の詩（「発臨洮将赴北留別」）では、内地をはなれる時の覚悟として、勤王の志の異域旅行のさびしさをわづかに支へるをいふ。

しかし、こんな作ばかりではない。はじめの時の上官である高仙芝に呈した詩（「武威送劉単判官赴安西行営便呈高開府」）は

熱海亘鉄門、火山赫金方、白草磨天涯、胡沙奔茫々。
と熱海すなはちイシククル湖の形容からはじまり
男児感忠義、万里忘越郷

と望郷の念をさへなくすることをいひ、ついで

都護新出師、五月発軍装。甲兵二百万、錯落黄金光。
揚旗払崑崙、伐鼓振蒲昌。

と出兵の五月であったことなど、史籍に見えない事実をあげ

有時無人行、沙石乱飄揚。夜静天蕭条、鬼哭夾道傍。
地上多髑髏、皆是古戦場。置酒高館夕、辺城月蒼々。
軍中宰肥牛、堂上羅羽觴。紅涙金燭盤、嬌歌艶新妝。

と戦場ならびに軍中のありさまを写し出す。これははるか後方の涼州にあっての想像ではあるが、実景の写生に近いものだったことは疑ひない。タラスの戦を直前にした軍人が、牛を料理し、酒盃をとばし、なほかたはらには歌をもて興をそへる女性のゐたことなど、この詩で知られるが、敗戦については、集中に見えない。もとより高仙芝は敗戦の理由も、敗戦の事実をも隠したのではないかと疑はれるが(十七)、それならなほさら岑参は歌ふことができなかつたらう。

二回目の主将封常清は遠征に功を収めたので、その勝利をたたへる作(十八)は見える。「北庭西郊候封大夫受降回軍献上」もその一で

胡地苜蓿美、輪台征馬肥

ではじまる。また「使交河郡」といふ詩でも、勝ったのちの「軍中日無事、醉舞傾金罍」といふ有様が写されてゐる。

これらの作品は実は高仙芝や封常清をたゝへるために作られたものである。作後たゞちに呈上されたにちがひない。それゆゑ軍中の飲酒も歌妓同伴も、なんら批判の対象とはなっ

てゐないのである。そこに私どもとの間に、感覚のずれの存在するのが看られるが、この点でもっと甚しいのは「玉門関蓋将軍歌」であらう。この詩は本国に安禄山の乱がおこり、封常清が呼びかへされたあと、岑参自らも帰還する途中、玉門関で会った河西兵馬使蓋庭倫を歌ったものである。高仙芝や封常清さへもが、頌へらるべき名将でなかったことは、このころすでに明らかになってゐた(十九)。しかるに詩人は懲りずまに、軍事的才能においてもさらに劣ってゐたと思はれる武人をかう詠じてゐる。

蓋将軍、真丈夫　蓋将軍はほんとのますらをだ。
行年三十執金吾　三十歳で近衛軍の長官だ
身長七尺頗有鬚　みのたけ七尺でだいぶんのひげ。
玉門関城逈且孤　玉門関の城はとびはなれてただ一つ
黄沙万里百草枯　沙漠のまんなかで草木もない。
南隣犬戎北接胡　南はチベット人で北はイラン人(二十)
将軍到来備不虞　将軍が来てから防備おさおさ怠りなしだ。
五千甲兵膽力麤　五千の兵隊は大胆で大力で
軍中無事但歓娯　仕事がなければたのしみばかり。
暖屋繡簾紅地爐(二十一)　暖い兵営には刺繍のカーテンかけストーヴをおこし
織成壁衣花氈毳　織成(二十二)のかべかけに花毛氈。
灯前侍婢鴻玉壺　あかりがつくと腰元は壺の酒をつぐ
金鑼乱点野駝酥(二十三)　金のなべには粗製のチーズや酒のかす。
紫紱金章左右趨　紫紱や金章の礼服がとびまはる
問着即是蒼頭奴　たづねればこれが将軍の奴隷だって。
美人一雙閑且都　美人がふたりゐてしづかで上品で
朱唇翠眉映明眸　あかい唇みどりの眉がすんだ眼とつりあってゐる。
清歌一曲世所無　それが歌へば歌は世間ではうたはない
今日喜聞鳳将雛　「鳳凰のすごもり」でけふたのしくきいた。
可憐絶勝秦羅敷　しほらしさはあの秦羅敷(二十四)よりずっとまさり
使君五馬謾踟躕　将軍の五頭立の馬車はその前ではわざとためらふ。
野草繡窠(二十五)紫羅襦　野の花のぬひとりをした紫の絹のはだぎをつけて
紅牙鏤馬対擕蒲　紅い象牙に螺鈿をしたこまですごろくをする。
玉盤纖手撥作盧(二十六)　宝玉の盤にしろい手でみな勝ちの采をふり
衆中誇道不曾輸　みんなの前で自慢する「負けたことのないのよ」と。
櫪上昂々皆駿駒　うまやでいばってゐるのはみなよい馬で
桃花叱撥価最殊　つきげと叱撥(二十七)とはなかでも高価なしろものだ。
騎将猟向城南隈　乗馬で猟にとみなで城の南隅にゆく
臘日(二十八)射殺千年狐　しはすに年とった狐をみごと射あてた。
我来塞外按辺儲　わたしが塞外に来たのは軍事費をしらべるためだったが

為君取醉酒剩沽　おかげで酔っぱらって酒を買ひすぎたようだ。
醉爭酒盞相喧呼　むかふでも酔って盃をとりあひさはいでゐる
忽憶咸陽旧酒徒　そこでふと長安の酒のみどもを思ひ出した。

むりに訳してみればかうもならう。杜甫の「花卿歌」、「魏将軍歌」、李白の「司馬将軍歌」などと同じ種類のもので、白居易などのやうに諷刺の意が全然ないのが、いくらか物足りないが、これが岑参の特色で、しかもまたはなはだしく具象的でいろいろのことを考へさせる。さうしてこの種類の軍人と、この種類の詩人とが盛唐の図風を保有し、やがて詩人としてもっと慷慨悲痛な作を杜甫がうたひ出すころには、軍人は性格は同じで、たゞ一層強力な地盤をきづいて節度使（藩鎮）とよばれる軍閥を形成する。詩人だけが変るのである。しかし岑参の変化のしかたは杜甫とは異ってゐた。それについてはまたあらためて書きたい。

註 (一) 中国で最近刊行された白居易関係の研究書は数多く、管見では単行本だけでも

王拾遺　白居易研究　一九五四　上海文芸聯合出版社
王進珊　人民詩人白居易　一九五四　上海四聯出版社
陳寅恪　元白詩箋証稿　一九五五　北京文学古籍刊行社
蘇仲翔　白居易伝論　一九五五　上海文芸聯合出版社
万曼　白居易伝　一九五六　武漢湖北人民出版社
王拾遺　白居易　一九五七　上海人民出版社
褚斌傑　白居易評伝　一九五七　北京作家出版社

等がある。これらの書に共通な、人民詩人白居易の封建社会に生れた者として、必然的な限界については拙稿「白居易とその時代」（歴史教育六ノ六、昭和三十三年）で簡単にのべた。

(二) 清華学報第八巻第二期（民国二十二年六月）所載。最近刊行の聞一多全集選刊三（一九五六、北京古籍出版社）にも収められてゐる。

(三) 聞一多氏のこの考定は「岑嘉州集」の杜確の序文の天宝三載、進士高第、解褐右内率府兵曹参軍といふ箇所と元の辛文房「唐才子伝」の天宝三年趙岳榜第二人及第といふのに拠ってゐる。

(四) 新唐書地理志に河南府陸渾県有鳴皐山といひ、河南通志には河南府嵩県東北五十里といふ。

(五) 新唐書宰相世系表、ならびに岑参の「梁園歌送河南王説判官」中の「単父古来称慮生、秪今為政有我兄」の箇所。

(六) 長安でのこの頃の作としては「送裴校書従大夫淄川郡覲省」といふ詩があり、天宝四載三月左遷され、ついで五月山東省の淄川の太守に任ぜられた斐敦復の子が父に会ひにゆくのを、長安で秋に送別した作であるから、この頃まで長安にゐたことは認められるが、その後の長安での作と認められるものはない。

(七) 岑参の作中には鳴皐山の名は見えないが、嵩陽、少室、嵩南、潁陽、南溪などの地名が見え、とりわけ「十五隠於嵩陽」（感旧賦序）によって、嵩山の南には早くから住居があり、「自潘陵尖還少室居止秋夕憑眺」の火点伊陽村、煙深嵩角鐘の句によって、嵩陽も少室の居止も同じ箇所をあらはしてゐることが

知られる。嵩南は乾元二年（七五九）虢州の長史となってからの作（初至虢西官舎南池呈左右省及南京故人）に他日能相訪、嵩南旧草堂の句が見えて、同じく少年読書の地であったことが知られる。南溪はここを流れる潁水の一支流であって、李白のいふ鳴皐山はかならずここの丘であらうと思はれる。

(八) 「胡笳歌送送顔真卿赴河隴」といふ有名な作がこれであってその秦山遙望隴山雲といふ句が、自ら長安にあって甘粛方面にある顔真卿を眺めやる趣をあらはしてゐる。

(九) 「李白詩文繫年」（一九五八、北京作家出版社）六一頁。

(十) 王琦「李太白全集」のこの詩の註には顔真卿の書した長安千福寺の多宝塔の碑は天宝十一載の所建で、その文は南陽の岑勛の撰だといふ。岑参と同郷でまた文を善くしたということになる。

(十一) 「李白」（昭和三十年、筑摩書房）一三七―一四七頁。なほこの詩の作を詹氏は天宝四載としているが、黄錫珪「李太白年譜」（一九五八、北京作家出版社）に附する「李太白編年詩目録」では「送岑徵君帰鳴皐山」とともに天宝八年の作としている。この年は岑参が高仙芝に招かれたと思はれる年である。

(十二) 杜確「岑嘉州詩集序」。

(十三) 王琦は明言しないが「送岑徵君帰鳴皐山」の註で岑参の「感旧賦序」をひいてゐる（一九三五、上海中央書局「李太白全集」第二冊一八四頁）。森博士は「唐詩選評釈」（昭和十四年、富山房文庫、下三五七頁）では岑参の「山房春事」の解釈で、李白の「鳴皐歌」を引いて、明らかに岑徵君を岑参だと認めておいでである。

(十四) たとへば内田泉之助教授「中国文学史」（昭和三十一年、明治書院）二三九頁以下。

(十五) 「為遣補薦岑参状」がそれであって、至徴二載六月十二日付である。

(十六) 今の新疆省吐魯番地方にあった高昌国の都で吐魯番の西二十華里のヤルホト。

(十七) タラスの敗戦では蕃漢三万から成った軍は数千となり、この後、中央アジアの石国（タシケント）も唐をはなれて、サラセンに附くこととなったが、高仙芝はそのために別に処罰も受けてゐない。

(十八) 岑参「献封大夫破播仙凱歌六章」によって、この時、破ったのは播仙であったことがわかる。播仙はチベットの一部といふことである。

(十九) 安禄山の敎軍が二十万と号して南下すると、各城市は守るものなく敵手にゆだねられたので、封常清がまづ洛陽に派遣され兵六万を募集したが、未訓練の常民のよせあつめで、洛陽はたちまち陥った。ついで潼関の険を守るべく派遣されたのが高麗出身の高仙芝であったが、これは守るのみで出でて戦はないといふので、封常清とともに処刑された。これが天宝十五載の前半のことであった。

(二十) 唐代には中央アジアのソグディアナ地方に住むペルシア系統のイラン人を指して特に「胡」と言ふ用例が出来た。（石田幹之助教授「唐史叢鈔」昭和二十三年、要書房。一三八頁）。

(二十一) 白居易の「別氈帳火炉」に紅火炉といふのが見え、これはフェルトの帳中に設けたストーヴであるが、紅地炉は誤字でなければ同物異称であらう。

(二十二) 石田幹之助教授「長安の春」（昭和十六年、創元社）五二頁

の註に引かれた中唐の詩人劉言史の詩では石国胡児人見少、蹲舞尊前急如鳥、織成蕃帽虚頂尖とあり、織物の種類をいふやうだが、姚汝能の「安禄山事迹」に掲げる安禄山の親仁坊の新宅に玄宗が下賜した家具には銀織成簿筐といふのがある。かごが銀のはりがねででも編まれてゐるといふのであらうか。

(三) 酥は牛羊の乳で製したチーズのたぐひ、酡は不明。酔と同義があるので仮に訳した。

(三) 漢の相和歌のうち「陌上桑」のヒロイン。道傍で桑とるこの女子に恋慕する使君は「五馬立踟躕」と歌辞にもある。

(三) 窠は不明。襦は襦の訛か。

(三) 雙陸の骰はもと五木と呼ばれた杏仁状の木製品で、一面は黒一面は白にぬり、五枚を一度に投げ、みな黒が出れば盧といって最高点である（原田淑人博士「東亜古文化研究」昭和十五年座右宝刊行会。九一頁）。

(三) 太宗の昭陵の前の六駿の中に什伐赤といふのがあり、純赤色と記されてゐる。「和名類聚抄」ではこれをアカゲと訳してゐる。叱撥はこの什伐赤の異字であらう（原田博士「前掲書」三八八頁参照）。

(三) 冬至より後の三度目の戌の日、また十二月八日と。